

# 防災教材作り

小中生向け 東広島市と連携

# 広島大が着々

## ビデオと実験装置

広島大防災・減災研究センター（東広島市）が、小中学生向けに防災教育の教材作りを進めている。本年度は地域の碑から水害の教訓を学ぶビデオと、土石流のメカニズムを知る実験装置の2種類を作り、市内の小中学校で活用する予定。西日本豪雨の経験を踏まえ「災害を身近に捉え、防災意識を高めてほしい」と取り組む。

（長久豪佑）

大学との共同研究に費用を出す市の事業の一環で、市側の提案を受けて取り組む。

教材ビデオ制作は、教育



防災教材ビデオの撮影をする関係者。水害碑について、児童が井上さん（左から2人目）の話を聞く場面を収録した

学研究科の熊原康博准教授（自然地理学）が担当する。児童5人が、同市高屋町溝口にある188年前の豪雨災害を伝える石碑を訪ね、地元住民に由来や教訓を聞き取る内容だ。

現地で11月上旬にあった

撮影では、高屋西小学校区住民自治協議会の井上泰秀副会長（71）から「この地で起きた水害について、昔の人が碑を建て、未来を生きる私たちに警告している」

と聞くシーンを収録した。他に河内町の住民団体から自主防災の役割を学ぶ場面などもある。

熊原准教授は「地域のことを深く知るきっかけにもしてほしい」と語る。約15分に編集するなどして年内をめどに完成させる見通し。市内の全小中学校に配布し、社会の授業などで活用してもらおう。

実験装置は同研究科の吉富健一准教授（地学教育）が担当。理科の授業で使う想定で、立方体の透明容器に、砂の粒子に見立てたガラス玉を満たした装置を作る。そこに水を注ぐことで、土中に雨が染み込み、地盤が崩れる仕組みを理解してもらおう。年内に約20セット作り、出前授業などで使うという。

市は本年度、研究費として計約270万円を助成する。市教委は「教材を使った指導案の作成など、現場で活用しやすいよう支援したい」としている。